



685 講談社現代新書

説得の文章技術

a 四百字詰原稿用紙五枚に、マルの数はいくつありますか？

b 漢字をどれくらい使っていますか？

これは、あなたの文章の「説得度」を測るテストの

マヌ例でせよ。文章で相手の「反感を得る」は「雄名誠」

どうしたらいいのだろうか。比喻を巧みに

使いこなせ、センテンスは短く、過度の漢字・

仮名を避けよ、おもげろ。エツクは最初の「を」は「や」やすく手ほどきした。

真似から始めよ、ビジネス文章では「型」を



安本美典

まで、豊富な文体実例を推計・分析するなかから、

「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ、人ノ下ニ人ヲ造ラズト言エリ」、
「甘言は友を作り、直言は友を失う」、
「生まれ生まれ生まれ生まれて生の初めを知らず、死し死し死し死して死の終わりをもちまゐらず」(西行『撰集抄』)などは、いづれも、対句法を用いている。

七五のリズム

初恋

まだあげ初めし前髪まえがみの

林檎りんごのもとに見えしとき

前にさしたる花櫛はなぐしの

花ある君と思いけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたえしは

薄紅うすくれなひの秋の実に

は、さらに、このような研究をもとに、『読みやすい文章の書き方 (The Art of Readable Writing)』や、『わかりやすい話し方 (The Art of Plain Talk)』を書いた。これらの本は、アメリカでは、ベストセラーになるほど、よく読まれた。

フレッシュによれば、文章の読みやすきは、次の二つの面に分けられるという。

- (1) 文章が「平易である (easy)」こと
- (2) 文章が「興味のある (interesting)」ものであること

文章が平易であること

フレッシュによれば、文章が平易であるかどうかは、センテンスの平均的長さ、用いられている語の平均シラブル数(音節数)とに關係するという。センテンスの平均の長さというのは、日本の文章でいえば、「マル」(句点「。」)から「マル」までの平均の長さである。センテンスの長さが平均して長ければ、文章は読みにくくなる。また reconsideration などのように接頭辞や接尾辞がついて、シラブル数の多い語は、たいてい抽象的なことばであるので、このような語が多いと平易でなくなる。日本語でいえば、漢字の多い文章などに相当すると思われる。

読むのか、仕事の参考になると思って読むのか、研究上の目的から読むのか。あなたは読者が、どんな反応を示してほしいと思っているのか。これらのことをはっきりさせて、それにあわせて書け。

(3) 執筆の設計について

平易で、しかも興味のもたれる文章にするには、ふつう、物語風に設計するのが、いちばんよい。本すじのあいだに、エピソードや、具体例、実際の応用などをはさむ。なにかを説明したりするばあいであれば、直接「あなた」で語りかけるスタイルがよい。また現在では、専門的な文章でも、会話文のしめる率は、しだいにふえつつある。文章のここぞと
思う部分を、直接話法で書くようにくふうすることは、大切なことである。直接話法でないまでも、会話的なスタイルで書くことは、読みやすさを、増すことになる。

(4) 読者の読む作業をたすけよ

読者の読む作業をたすけるように心がけるならば、間接的に、「読みやすさ」の得点をあげることになる。読者に、何がとくに重要なのかを指し示せ。何を覚えておく必要があるのか告げよ。これから、何を読むことになるのか、わかるように書け。そして、おわりには、何を読んだことになるのか、要点をまとめておけ。

と、いえるかどうかには、疑問がある。

若者文化の特徴

現代の若者文化、あるいは、いま優勢となりつつある文化の特徴は、なんであろうか。いくつかの特徴を、まとめてみる。

(1) カタログ文化性 筋道の通った、論理的にしっかりとした構成をもった文章や本よりも、やや断片的な、多くの情報のはいつている文章や本が好まれる。現代は、論理がなくても、生きていける時代なのである。雑誌でも、『ピア』とか『ダカーポ』、『ポパイ』『シティロード』などの、情報誌が好まれる。一つ一つの記事の長さが、短い。単行本でも、『雑学事典』のような、カタログ的なものが好まれる。

ここから、たとえば、入社案内や、私大の入学案内を、『ピア』などの情報誌風に編集したものがあらわれる。当世風の試みといえる。受験生たちに、ナウイ感じを与えることは、たしかであろう。

(2) ファッション性 実用性、機能性よりも、ファッション性が、重んじられる。どれだけ実際の役に立つかを訴えても、人の心を、動かしにくくなっている。生活が豊かになった

パスカルの方法

この本の「はじめに」で、フランスのパスカルが、論理による説得の方法について述べていることにふれた。パスカルは、すでに十七世紀に、その著『幾何学的精神』の第二部「説得術について」という文章のなかで、論理による説得、あるいは論証の基本的な方法などについて、明快に説明している（パスカルの方法については、埼玉大学の吉田洋一、立教大学の赤撰也共著の『数学序説』培風館刊参照）。

パスカルはまず、「定義」について、次の三つの規則をあげている。

- (1) それよりもはっきりした用語がないくらい明らかかなものは、それを定義しようとしな
こと。
- (2) いくぶんでも不明、もしくはあいまいなところのある用語は、それを定義しないままに
しておかないこと。
- (3) 用語を定義するにさいしては、完全に知られているか、または、すでに説明されている
ことばのみを用いること。

次に、パスカルは、「公理」について二つの規則をあげている。公理というのは、議論の出
発点または前提ともいわれるものである。

あるという保証にはかならずしもならない。

論理による説得は、しばしば論理的にととのっていけば正しいという態度を生みがちである。論理的に導きだした結果が、現実とよく合致しているかどうか、もう一度よくチェックしてみる必要がある。そのチェックが落ちていると、論理的にはととのっているが、現実や事実とあわないというようなことが、しばしば起きる。「理路整然とまちがっている」というようなことになるのである。

論理による説得の手づき

そのような問題はあるにしても、論理による方法は、他の方法にくらべてきわめて体系的で、構造的な知識をもたらすことも事実である。

論理による説得を行うには一般的にどのようなことに気をつければよいのだろうか。論理による説得は、次のような手づきによって行われると考えられる。

(1) 具体的な多くの事実やデータから、帰納的な方法によって、比較的わずかな、いくつかの前提(仮説、仮定)を導きだす(帰納を行う)。

(2) そのいくつかの前提を出発点として、形式的にととのった落ちのない議論を展開し、結